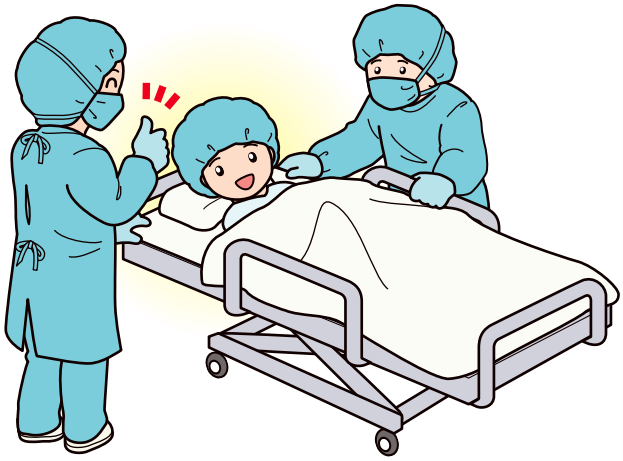
最優秀賞（一般部門）　日吉 えり子

心に残る技士さん

一九九一年から透析を受けております。心に残る技士さんとの出会いは、二〇一九年三月、肺ガン手術のために、とある病院に入院した時の事です。

三月六日初診、十一日入院、十五日手術。「お願いします」の意思表示後、びっくりするほどのスピードで、日程が決まりました。無事に生きている、とは、こういう幸運の積み重なりなのでしょう。暗い透析の歴史の中で一筋の光明のような思い出です。

入院後、初めての透析時、穿刺してくださったのがSさんです。「いつもは手術室勤務ですが、今日は久しぶりに透析室です。もしかしたら、日吉さんの手術も担当するかもしれません。手術室で会ったら声をかけてくださいね」。あの独特な静寂の中、お顔がわかるはずもありません。精一杯ふんばって入室した手術室で聞こえた、「日吉さん、頑張ってくださいね」の声。ありえない。私の名前を呼ぶ声。あの時の技士さんだ！見知らぬ土地で肉親のような声。ありがたかったです。緊張も不安も消えるほど救われました。



退院前の最後の透析時、手術室の件をスタッフに話しお礼を伝えては来ましたが、冊子で作品募集の記事を目にして文字にすることを選びました。

医療技術は日進月歩です。AIがどんなに進んでも人の心にまでは届きません。心が熱く癒やされるのは人の声です。どうか人の心を持つ医療者であり続けてほしいと願っています。

https://ja-ces.net/jinzai/